戦国時代の豊後府内港

岡本良知

目次

はしがき
一、戦国時代九州東部外国船渡来路程
二、海外貿易港としての豊後諸港
三、府内と沖浜

はしがき

室町時代後半期の海外関係といえば、主として中国とのそれであつて、公式には幕府の遣明船渡海、非公式には倭寇の侵害である。この時代の末期約半世紀餘にわたつて、数度の遣明船が瀬戸内海の海賊を避けるために、堺から直ちに南下して太平洋へ出で、四国の南方と九州の東方の海を渡つて薩摩・大隅へ寄り、それより南方諸島に沿うて航海し浙江省の寧波へ向うたことがある。帰途にもこの同じ迂廻航路をとつたが、その間のことはよく研究せられている。[1] けだしそれは応仁乱後の諸国の無秩序と頻発する戦乱とに由来した。その間に於ける海上の不安と危険とは、遣明船だけがこれを避けたのではあるまい。内外民間の渡海船の多くも、瀬戸内海より関門海峡を通つて玄海へ出る航路を暫くは危んだのではなかつたかと思う。海外渡海に関する限り日本の民間船とは、天文の末よりその活動の激しかつた倭寇を意味するが、それは主として九州西部及び南部沿海地方から発出したのであるから、それを除外すれば、天文の中頃から頻りに我が国へ航通した浙江以南の中国船を問題にしなければならない。

事実に於て、天文年間に毎年貿易のために我が国へ往来した夥しい数の中国船は、その大多数が福建省南部の漳泉地方より出で、幕府の遣明船と同様のコースを辿つて、主として南九州諸港へ蝟集し更に東九州へも波及した。九州のうちでも避遠にして交通の最も不便なそれらの国々を択んで中国船が渡来したには、勿論然るべき理由がなくてはならない。そ

の才一は、前述の如く、海上の危難を避ける、いい換えれば、他の地方へ来るよりは航程に海賊の禍害が少なく、且つはいくらかでも安心して取引ができることであつたろう。それには南九州に於ける島津氏、東九州に於ける大友氏が、九州では他よりも強力であつて、支配力が比較的に行きわたつていたからであろうと考えねばならない。

天文の中頃に初めてヨーロッパ人の船が日本へ渡来した。その始めは南九州の諸港へ出入したが、天文の末から弘治・永禄までの十餘年間は九州西部の平戸と東部の豊後とへ来たのである。されば天文・永禄の間に於ては多数の中国船とポルトガル船との輻輳した南九州と東九州との諸港が、海外貿易の一中心となつたということができる。

わたくしの目的はこの間の海外貿易を顧みて、東九州に於ける外国船出入の諸港を南より北へ尋ね、その終端とも見做すべき豊後の首都府内の港の実際の状態を考察しようとすることである。

一、戦国時代九州東部外国船渡来路程

明の鄭舜功の日本一鑑浮海図経巻三[2]に、夷海右道と名づけて南九州と東九州との沿海諸港の名が列挙されている。その記載の順に従つてこれを指摘すれば、硫黄島・屋久島・種島・捧津・山川津・大泊・月浦・志布志・千湊・門浦・目井・油不郎・内海・赤井・伯・徳漂・耳・土持・細島・佐伯・垢水・東海・竹島・坂関・高嶋・臼杵・釜江である。これに続いて土佐・阿波の沿岸を経て堺へ着き、それより小船に乗りかえて淀川を遡り鳥羽に達するまでの十九の諸港を列記するが、ここには必要がないから、それらの港名はこれを閑却する。

鄭舜功は日本の地名を中国音に代えないでそのままに伝えたので、一見してほぼ何処であるかがわかる。然しそれでも今は別の文字を充てたものがあるから、念のために以上の諸港名にいくらかの説明を加えよう。

硫黄島はその名の通り、種島は種子島であつて、共に薩南の島であることは何人にも疑いのあるはずがない。捧津は今は坊津とし、山川津が山川で、これらも薩摩半島南部の当時著名な海外渡海の要津であつた。大泊は大隅半島の南端の佐多岬に近い伊座敷浦[3]、月浦が大隅肝属郡の内浦[4]である。志布志はそのまま。千湊はチノノ湊と称び、近頃まで日向国南那珂郡（当時の宮崎郡）福島に近い崎田浦[5]（今は串間市のう

ち)。門浦は同郡の外浦、目井が目井津、油不郎が油津(今日南市のうち)であるが、外浦と目井津は順序があべこべになつている。内海は今は青島の一部分であり、赤井が宮崎市街の東南に接し大淀川々口にある赤江である。伯はよくわからぬが宮崎市の直ぐ北に連なる穩村(今は宮崎市のうち)かも知れない。[6] 徳潭は一ッ瀬川々口の徳淵、[7] 耳は美々津である。土持は今は延岡市の一部分となつている県、細島はそのまま(今は日向市の一部)。但しその順序は逆である。佐伯は豊後の港であるが、ここにはただ言及されているだけであろう。垢水はまた赤水と書かれ、日向東臼杵郡にあり、土持と細島との間に置かれねばならない。[8] 東海はそのまま。[9] 竹島は不詳、[10] 坂関は佐賀関、[11] 高嶋はそのまま、[12] 臼杵もその通りで、釜江が蒲江であるのにも疑いがない。これらの豊後の諸港は当時の海部郡にあるが、その順序が乱れている。釜江・佐伯・臼杵・高嶋・坂関とすべきである。

なお、釜江の条に「次四浦、口〇抵古河、即府内也、海曲之中次曰澳浜、澳浅、膠舟不堪繫泊、陸行府内五六里」と続いているのに特に注意せねばならない。これを説明すれば、四浦は津久見湾を抱く保土半島の尖端に近い四浦湾、それより今の別府湾に入つて古河即ち府内に達するという。四浦から別府湾へ入るまでに臼杵・佐賀関があるわけだが、ここには鄭舜功の乗船が四浦へ寄つて直ぐに府内へ行つた実際の経験を語つたのであろう。古河には府六佳歪と音ぜられている。今大分市の一部分となつている堀川町に該当するらしい。[13] 古河には府内附近でただ一つ小船が入ることのできる入江があつたのであろう。次に一鑑に烏気法邁と読まれている澳浜即ち沖浜が挙げてある。府内の沿岸が遠浅で、船の停泊に適しないので、陸行して五・六里の沖浜へ船が着くという。五・六里とは勿論中国里程であるから、我が日本の里程では一里に足りない距離である。

日本一鑑記載の航海路程は、前記の夷海右道と、九州西岸に沿うて北上し関門海峡より瀬戸内海へ進む夷海上道と、陸路九州西部より山陽道を辿る夷海陸道とであつて、凡て京都を目的地とする。これらの路程記にしてもその他の日本の記事にしても、皆それは著者鄭舜功が日本に於て入手した諸資料に拠つたのであるが、前記の夷海右道即ち東九州沿岸路程に限つては、彼が嘉靖三十四年(弘治元年、一五五五年)春に広東を発ち、福建沿海より出で、琉球沿海を経て豊後へ渡

来し、翌年秋に帰国したその間の経験・見聞に日本の資料を対照してこれを書いたことは推察に難くない。また、嘉靖年間に作られた他の日本関係中国書に見られるような、天文・永禄頃渡来の多数の中国船から得た情報も加えられているに違いない。されば、この書に記された東九州沿海諸港は、必ずしも外国船の入つた処だけとはいえない。恐らくは外国船の屢々出入したのは、寧ろそのうちの限られた少数であつたであろう。それに拘らずこの書は兎に角薩摩・大隅を経て日向へ、更に豊後へと北航する路程にある大小の港を殆んど悉く挙げて、大略は当を得ている。永禄の頃には多数渡来中国人の東九州沿岸航路に関する知識は、必ずしも一鑑の著者程には精詳でなかつたかも知れないが、これに近いまでに達していたことは否まれない。当時の日本関係専書でなくして、東九州の諸港に言及したもの、例えば明末の百科全書とも見做すべき章潢の編纂した図書編を見ても、その巻五十日本国序に、羊埋高、陁馬里、暗孛喇、密孛著、福乃、倭几奴法壳、鎖孤舟、由奴烏喇、撒一基、烏四基など（これらの地名は順に山川・泊・油（津）・志布志・府内・沖浜・佐賀関・四浦・佐伯・臼杵に該る。）を指摘できるところによつても、それは推察できる。

けだしこれらの諸港名を音ずるに充てた文字が、一鑑や日本図纂などに見えるものと悉く異つているところから考えても、この日本の項がそれらの書に基づいて作られたというよりも、日本・中国間を往来した中国人または日本人より直接間接に收得した知見に負うところが多いのであろうと思われる。

翻えつて天文の中頃に初めて日本沿岸へ出現したヨーロッパ人の先駆者たるポルトガル人の方を見ると、彼等のうちには早くも天文十五年（一五四六年）に南九州及び微かにではあるが東九州の見聞を伝える報告書を書いた者[14]があるから、[15]次にその書に記された諸港の名を挙げてみよう。

一、Façata, Angune, Chende, Maioz, Achime, Boo, Jamagon, Changaxuma.（以上は鹿児島湾の北西及び東方にあるという。）

二、Nexime, Minato, Tanora, Dozorina, Fungamon, Bunono, Chenou.（以上は東方にあるという。）

才一群の諸港を鹿児島湾の北西及び東方にあるとするのは、北西及び西方の誤解に違いない。それを順に比定する

と、博多・阿久根・川内・米津・秋目・坊・山川・鹿児島であつて、そのうちに位置の順序が違うのもあるが、聞知のままを書き並べただけだから、ここにそれを一々詮議する必要もあるまい。(16)次二群の諸港は、根占・(17)〔千〕湊・外浦・細島・日向・(18)豊後・(19)シェンデ(20)(不詳)にあてられる。

わたくしの知る限りでは、天文十五年にこの報告書を書いたアルヴーレスの船と他の二艘のポルトガル船との薩摩・大隅の諸港へ来たのは、ヨーロッパ人の船の最初の日本沿岸出現であつた。従つて、彼等は未だ日本近海の案内に通じなかつたので、中国に於ける当時の彼等の密貿易の根拠地たる福建省の漳州より中国人のパイロットを雇傭し、毎年日本へ往来した中国船の航路を辿つて、更に中国船の出入した薩・隅二州の諸港へ渡来したのであろう。兎に角この年には、前述の如く、鹿児島湾内外の諸港へ来たポルトガル船三艘が薩・隅二州以外の国の港へ入つた形跡がない。アルヴーレスが彼の報告書の冒頭に、「わたくしの聴き得た情報によつて、」とことわつたのは、彼の書き留めたことの大部分を、彼自身の直接に経験したことではない、いいかえれば他より聴き知つたという意味である。彼の報ずるところでは、その年即ち天文十五年秋の颱風のために、鹿児島湾の或る一港だけで七十二艘の中国船、三艘のポルトガル船のうちの一艘が難破した。この一事例はその年に於ける薩・隅二州の諸港へ来た中国船の数が如何に夥しかつたかを暗示する。アルヴーレスは鹿児島湾内では到る処で中国船と共に碇泊しなければならなかつたであろう。それらの中国船の乗員の多くは既に南九州へ往来した経験を有つていたであろう。しかもアルヴーレス自身も中国人をパイロットに傭うていたと思われるから、彼の得た情報が、恐らく中国人に基づくことは推察の限りである。天文中頃には、中国船が専ら薩・隅二州へ蝟集したのであるが、当時既にその幾分かが日向・豊後の両国へまでその航程を延張した証拠がある。(21)然し西九州の肥後・肥前・筑前などへは未だ殆んど行かなかつたのであろう。されば、アヴーレスに語り伝えた中国人には、東九州への航海の経験が少なかつたから、ただ莫然と日向・豊後の国名を以てそれを示したが、西九州の方では、古くから中国人に聞えていた博多以外には殆んどそれを知らなかつたのであろう。更にアルヴーレスが、「本土の方に就いては知ることがない」と述べたところによつて、中国人には本州に関する智識が缺けてい

たことをも暗示する。

以上はわたくしの推測であるが、それに対照するために、他のポルトガル船の航海路程記を引用しよう。リンスホーテンが十六世紀の末にオランダ語に訳して輯録したポルトガル船アジヤ諸国航海路程記集に掲載されている浙江省沿海のリヤンポより日本への一航海路程記にある次の諸港名である。(22)

Ycoo, Tanaxuma, Minato, Xibuxij, Quimonsiquy, Tanora, Gico, Umdra, Unbo, Toconcfouchi, Myme, Tomxijma, Camyco, Usuqui, Sanganoxequi, Aquinafama, Fingy.

これに港名を比定すれば、順に硫黄(23)〔島〕・種子島・〔千〕湊(24)・志布志・肝付(25)・外浦・ジコ（不詳(26)）・油〔津〕(27)・鵜戸(28)・徳淵・美々〔津〕・細島(29)・蒲江(30)・臼杵・佐賀関・沖浜・日出に充てられる。これらの港名のうちで、千湊・志布志・肝付の順は逆になつている。

この航海路程記はリヤンポから日本への航海指針として書かれたものであり、リンスホーテンが、「前述の航海をしたポルトガル人一航海士の調査にかかる」とことわつているから、ポルトガル人の一五四二年乃至四三年（天文十一・十二年）に於ける日本発見のときより、彼等の浙江省沿海の密貿易根拠地たるリヤンポの一五四四年末または一五四五年上半に於ける破滅(31)までの二・三年間に行われた一ポルトガル船の航海記録であると見做されるかも知れない。然し、この路程記には、前記の東九州沿海諸港に四国・中国・近畿地方沿海諸港のそれが連続しているところでも察せられるように、後にポルトガル人が日本で入手した資料だけによつて作つた指針記をも合せて、リンスホーテンがこれを編輯したことも明かであり、またこの路程記の佐賀関の条に、この港へフランシスコ・マスカレーニャスの船が入つたことがあると関説したところから見ても、少くともただ一度一五五六年（弘治二年）に豊後へ渡来したそのフランシスコ・マスカレーニャスの船の頃の航海記録も参輯されていることは推察に難くない(32)。というよりも寧ろこの東九州沿海路程記には、弘治・永禄の間に豊後へ来たポルトガル船の航海路程記によつて主として編輯されたものと見做すべきであろう。事実に於てポルトガル船は、一五五一年（天文二十年）、一五五六年（弘治二年）、一五五八年（永禄元年）、一五五九年・一五六〇年の五度豊後へ渡来したのである(33)。されば、天文十五年のアルヴー

レスの報告書より少くとも十年を経た後の航海経験を記録するものと認めねばならない。これによつて、前に天文十五年には薩摩・大隅以外の港を知らなかつたポルトガル人は、十年後には東九州の諸港にも通達していたことがわかる。この路程記に於て特にわたくしが注意したいのは、豊後に於て佐賀関・沖浜・日出が記載せられて、府内が漏れていることである。

以上に、戦国時代の天文・弘治・永禄にわたる約二十年間に、外国船がその始めは南九州へ、年を重ねるに従つて東九州へ渡来したことを述べ、外国船の知つていたまたは入港した諸港も、薩・隅二州に始まつて日向・豊後に及んだので、それを外国人の記録に従つて列挙し、これにいくらかの説明をしたのである。

二、海外貿易港としての豊後諸港

前述の如く、天文二十年より永禄三年までの九年間に五度ポルトガル船が豊後へ渡来したが、十六世紀末と十七世紀中頃とに日本耶蘇会で作つた二つのポルトガル船日本渡来年表[34]にも、耶蘇会士の書翰の多くにも、それらの船が言葉通りの豊後へ来たと記録されている。それをいいかえれば豊後を目的として来たことである。事実に於て、それらの船は広東省沿海の彼等の通商根拠地を出帆してから、通例は途中で他の港へ寄らずに、真直ぐに豊後へ到達したことを、それに便乗して来た耶蘇会宣教師達の諸書翰によつて推知できる。その場合の豊後とは、前に列挙した蒲江・佐伯・四浦・臼杵・佐賀関・沖浜・日出の諸港の悉くを意味しているのではない。薩摩でも大隅でも更に日向でも、その沖を通過してどの港へも寄らずに来た船が豊後に限つて幾つかの港へ入つたわけがない。またその必要もなかつた。というのは、ポルトガル船の目的とするのは豊後に於ける主要な一港であつたからである。

それならば、ポルトガル船の航海路程記に、何故に東九州諸港の名・その位置・距里・港湾の良否・深浅などを詳しく記録せられねばならなかつたのかとの疑問が生ずるかもしれない。それに就いてことわつておかねばならぬのは、この種の路程記が普通の航海記と異なり、専門の航海士が船を操縦するための指針として作られたことである。ポルトガル船に限らず凡てヨーロッパ諸国の船は、既に当時航海した路程

の海上や地点の緯度を測り、海の深浅・底土の質・障害物の有無などを記録した。また陸地に臨んでは沿岸を測定して海図を描いた。航海の経験がない沿岸でも、できるだけその地の情報を入手した。こうして世界諸地方の路程記が作られたのである。それには、通例寄港しない港湾へも万一の場合には避難しなければならぬとか、その他の種々の理由もあつたのであろう。前引のリャンポ・日本間の航海路程記もその例外ではなく、入港すると否とに関せず、路程に沿う東九州の諸港は殆んど悉くそれを記録し、未到の四国や本州西部沿海の記事をも探知できる限りに於て詳しくこれに添加したのである。

さてポルトガル船が五度も豊後へ渡来したが、その目的港は何処であつたであろうか。当時のことを語る諸書を見るに、例えば豊薩軍記や歴代鎮西志に、天文十年に二百八十人の乗り組んだ中国の大船が府内の神宮寺浦へ着き、十二年にまた同地へ中国船五艘が来て、それから後には毎年入港したこと、豊後国志にも春日浦（即ち神宮寺浦）は菡萏港ともいわれて、古は西蕃の船がそこへ輻輳したことが伝えられ、また豊後国志所引の南浦集や新井白石の采覧異言などには、天文十年に神宮寺浦へ来たのをポルトガルの一大船と記されているので、当時の府内郊外の神宮寺浦こそポルトガル船・中国船の豊後来航の目的地であつたと考えられるかも知れない。然しそれらの書は、天文・永禄の頃から数十年後或いは百数十年後に作られたので、これをそのままで信用することができない。天文十年には未だポルトガル船が日本近海へ現われたことがないという一例を指摘しても、その誤伝であるゆえんがわかる。神宮寺浦着船の記事には、府内に於て後に行われた伝説を書き留めたという以外に価値がない。とはいうても、この伝説の悉くが誤つているというべきではない。何故なら府内の住民の間に数十年後も、曽ては外国船が頻りに府内へ入港し、そのために貿易港としても府内が殷賑を極めたという記憶が承け伝えられて来た一証と見做すことができるからである。

その点では、前記の諸書よりも鮮明な記憶を語るのは、大分市史上巻の大友時代に引かれている軍記略であつて、永禄初年の府内の盛況を叙して、永禄二年に大明と南蛮の船が豊府へ渡来したという比較的信頼に堪える記録を遺している。豊後へ来たことのあるポルトガル人にして、ポルトガル船の

府内と推定される港へ入つたことを語るのは、フェルナン・メンデス・ピントだけである。一五五一年のドアルテ・ダ・ガーマの船の出帆したときと、一五五六年のフランシスコ・マスカレーニャスの船の到着したときとの都合二度にわたつてFucheuという地名を述べた。[35] Fucheuが府中に充てられるとすれば、勿論府内を指すものであるが、果して当時の府内が府中ともいわれたかどうか、またメンデス・ピントが二十数年後にその著書を作つたときに、Fucheuを府中の発音として語つたのか、それとも彼の気紛れな記憶にまかせて確信もなくそう書いたのかは確かめることができない。

その他にポルトガル船の着いた港として確実な記録に載せられるのは日出と佐賀関とである。日出は府内の北方約四里を距てて同じく別府湾に臨み小港湾を有する。佐賀関は別府湾を抱く南の半島の尖端に近く、遙かに伊豫の佐多岬に呼応して豊豫海峡の北端を扼する良港である。ポルトガル船の日出碇泊を明かに述べたのは、これ亦フェルナン・メンデス・ピントである。[36] 一五五一年に彼も乗つていたドアルテ・ダ・ガーマの船が、山口から府内へ来たフランシスコ・シャヴィエルを日出に入港してこれを迎えたことを詳さに語つた。それに就いては、一五七七年より一六一二年まで日本に滞在し、耶蘇会士中では最も日本の事情に精通していたジョアン・ロドリーゲスも亦その著書中で「山口に於ける〔キリスト教の〕勢がこのように盛んであつた間に、カピタン・ドアルテ・ダ・ガーマの船が豊後国日出の港へ入つた。日本の商人達がそれをパードレ・フランシスコに伝達すると、パードレは直ちに、船のカピタンと〔ポルトガルの〕商人達とへの書を携えて一信者マテウスを日出へ遣わした。その書のうちで、パードレは彼等に〔印度の〕近況の報知を求め、且つは遠からず彼が豊後を訪ねるから、その際に彼等の告解を聴こうと述べた。ポルトガル人達は非常に感謝してそれに答え、併せてゴアのパードレ達からパードレ・フランシスコへ宛てた諸書翰をマテウスに手渡した。[37]」と記した。わたくしはメンデス・ピントの語つたところを悉くそのままでは信用できないとしても、ジョアン・ロドリーゲスは妄説をする人物ではないと考えるので、メンデス・ピントの述べたことの総てが嘘事でないゆえんをこれによつて知ることができた。少くともその船の日出へ入つたことだけは、現存しないシャヴィエルの書翰にその間のことが報ぜられていて、[38] ロドリーゲスがマ

カオでそれを読んだのだろうとわたくしは推定する。ロドリーゲスはまた別に、「この（豊後）国には日出の港があり、当初にはポルトガル船がそこへ交易に行つた。」[39] と述べた。この一文を見て、その始め頃にはポルトガル船が一度ならず日出へ入つて貿易をしたように解されるかも知れない。然しポルトガル船という語が単数で表わされているし、その上ポルトガル船は、前述の如く、五度豊後へ来たが、その才一度は一五五一年に、才二度以下はそれより数年を隔てて一五五六年から一五六〇年までの五年間に五七年を除いて毎年着いたことを知れば、ロドリーゲスのいう当初とは一五五一年の一度だけを意味しているに違いない。そうして、この一五五一年の船は、メンデス・ピントによれば、日出からではなくて府中から出帆したのである。この船が、実際に於て、府内に極く近い別の港へ移り、そこに久しく碇泊したことは後に考証する通りである。[40] このように一五五一年に初めて豊後へ渡来したポルトガル船が、始めは日出へ、後には府内に極く近い一港へ入つたとすれば、それは後の四度のポルトガル船の場合にはなかつた異例であるから、そこに何か理由があつたのであろう。例えば、豊後へは初めてのことだから、府内へ向うコースを間違えて日出へ着いたとか、または府内に騒乱があつたので一時的に日出へ避難したとかいうようなことである。兎に角日出の港は、当時豊後の一要港であつたのは、日本一鑑・〇島新編巻四の日本諸地名解説中にも記載があり、また一五八一年（天正九年）三月に耶蘇会の巡察使アレッサンドロ・ヴリニャノが、同会の宣教師七人を伴うて府内を出で日出へ廻りそこから乗船して京都へ向うたという[41]一事例によつても知られるところである。佐賀関に就いても、フェルナン・メンデス・ピントによつて、一五五六年のフランシスコ・マスカレーニャスの船がその年の秋に Xeque から出帆したと伝えられたのがただ一つの記録である。この船にもメンデス・ピントは乗船していた。そのいう Xeque が佐賀関に違いないことは、別の記録によつて裏書きされる。それは前引のリンスホーテンの編輯したリァンポ日本間のポルトガル船航海路程記中の佐賀関の記事中に、そこへフランシスコ・マスカレーニャスの船が入港したことがあると関説せられていることである。前にも述べた如く、フランシスコ・マスカレーニャスは船のカピタンとして一五五六年にただ一度渡来しただけである。尤もこの船がその年七月初旬に、当時大友義

鎮に反抗して内乱を起していたその重臣の領土内の一港へ先づ誤つて入り、それから府内へ移つたことは、その船に乗つて来た耶蘇会の東印度管区長ベルシオール・ヌーネスの一五五八年一月の書翰でも、そのとき府内にいた在日本耶蘇会の長老コスメ・デ・トーレスの一五五七年十一月の書翰でも報ぜられた。[42] この船はそれより少なくとも十月一日までは府内附近に投錨していたようである。何故なら府内に新築された天主堂でトードス・ウス・サントスの日に最初のミサを唱ずるために、[43] この船内に泊つていた前述のパードレ・ベルシオールが、別の舟でそこへ赴いたと前引のコスメ・デ・トーレスの書翰に見えるからである。[44] ここに別の舟で府内の町へ赴いたというのは、後に説く如く、[45] 府内地さきの海が浅いので、ポルトガル船から上陸するには、小舟を用いなければならなかつたことを意味するのであろう。この船の佐賀関港へ入つたのはそれより後のことであつた。されば十一月に出帆し去るまでに一箇月乃至は更に少日数だけしか佐賀関に碇泊していなかつたように思われる。この碇泊地の移動は、前引のコスメ・デ・トーレスの書翰やベルシオール・ヌーネスの書翰[46] で知られる通りに、この船の豊後へ着く二箇月前から府内に反乱が生じて、町は久しい間殆んど無政府状態に陥つていたから、出帆の準備をするために佐賀関港へ避難したことであろう。この反乱は、大友氏の重臣達が若い領主義鎮を廃するためにその殺害を謀つたのに対し、義鎮の方でそれを反撃し、遂に反乱に加わつた十三人の重臣達を滅ぼした事件である。その戦乱は一夜にして七千人も死んだといわれる程悲惨極まるものであつて、義鎮自身も府内から逃避して久しく帰らなかつたという。ポルトガル船の入港はこの一度だけであつたが、兎に角佐賀関は海上交通の要衝にあるから、内外船共に屢々寄港したことであろう。それは日本一鑑を始め当代のその他の日本関係中国書にその名が記載されているし、また一五八五年（天正十三年）七月に耶蘇会士フランチェスコ・パッシオが豊後から上京するのにこの港で乗船した[47] ところによつても察せられる。

蒲江・佐伯・四浦・臼杵などの諸港に就いても、日出・佐賀関と同様に地方的な良港としてその存在が認められていたことは疑えない。豊薩軍記などには、天文十五年に中国船が佐伯へ来り、天正三年に臼杵へも着いたと伝えらている。それをそのままには信ぜられぬとしても、そのようなことがあ

たであろうと思う。然し中国船の入港の回数は甚だ寡なかつたのであろう。というのはそれらの諸港では常に外国船を誘引するに足る程多くの物資が集散されず、遠い国々からの商人の往来も稀であつたと想像できるからである。沖浜に就いてはこれらの諸港とは全く異なる事情があつた。それは後に更めて説こう。

翻つて当代の豊後の状勢を考えるに、天文十九年（一五五〇年）に弑虐された大友義鑑の時代に已に大友氏の威勢は北九州の諸豪族の上に抜ん出て、大分市史上巻大友氏時代所引の系図に従えば、豊後・豊前・筑後・肥後の四箇国と肥前・筑前の一部分を領有するようになつたということである。実際にはそれ程の勢力を有つていたわけではなかつたが、兎に角西国才一の強豪たる山口の大内氏の圧力に堪えられるだけの九州に於ける恐らく唯一の実力ある豪族にはなつていたのである。義鎮の代になつて、先づ天文二十年（一五五二年）に肥後を攻略し、次いで弘治年間・永禄の初半を通じて豊前・筑前に於て大内氏に代つた新興の強盛な毛利氏に対抗し、永禄七年（一五六四年）より十一年にわたつて遂に筑後・筑前を征服し了えた。前引の系図に、豊後・豊前・筑後・筑前・肥前・肥後六国と日向・伊豫の半国を領有したと誇称しているのは、永禄末年より天正の始めに及ぶ大友氏最盛時代のことである。当時は薩摩・大隅に盤居する島津氏の勢力は未だその外へ膨脹するまでに達せず、肥前の龍造寺隆信も擡頭していなかつた。

豊後の首都府内は大友氏とその盛衰を共にしたのは当然である。義鑑の晩年から義鎮時代の上半期までは大友氏の盛運の上昇期であつたから、府内の都市生活は未曽有の活況を呈したに違いない。当時のことを語る書、例えば大分市史所引の軍記略には、永禄初年には大友氏領有の諸国が平穏にして、豊府は「極繁花、自二府内一至二高崎一、士宅商家不レ餘二尺地一」といわれるのは、府内の繁栄をやや誇大に伝えるものであろうが、その一斑はこれを以て窺い知ることができよう。[48] 兎に角諸国の都市も村落も荒廃した乱世に於て、数箇国を兼併する程強力な豪族の本拠地として、且つは内外船との貿易の中心地として出現した府内に就いて、永禄八年（一五六五年）に耶蘇会士ジョアン・バウチスタが、府内を当時の日本に於ける大きな都市の一つであると報じたのは当然のことである。[49]

ここに於てその間の日本の海外貿易の推移を顧る必要がある。足利時代の末期に生じた遣明船の南海迂廻路程の一部分をなす南九州及び東九州沿岸へは、前述の如く、天文中頃になつて先づ中国船が現われ、ポルトガル船もこれに追随して渡来した。その間に中国南部三省沿海に於ける日本人・中国人共同の密貿易即ち倭寇は、中国で仏郎機と称せられたポルトガル人の密貿易と相伴うてその猛威を発揮した。当代の倭寇は九州西岸地方、殊に肥前の島々を根拠地として発出したから、日本人・中国人の密貿易船の往来も亦次第に肥前の沿海に頻繁になつて行つた。中国より肥前への航程は、福建省沿海より出て琉球列島及び南方諸島に沿うて北上し、南九州に達してから五島に寄り、或いは浙江省沿海から東北方に直航して五島に達し、それより肥前の諸港へ入ることになる。それは蓋し日本・中国間に古来行われて来た航路に戻つたことである。そうして、その昔の博多に代つて平戸がいまや海外貿易の中枢を占めるようになつた。日本一鑑（窮海河話巻四）の著者も、日向・薩摩・大隅などの倭寇関係を指摘した後に平戸の当時を、「平戸島昔鮮人居、今居商衆、二十年以来為二番舶之淵藪一、中国流逋移レ家受レ〇錯綜盤固」と語つた。番舶の淵藪とはポルトガル船貿易の中心地という意味であろう。事実に於ては、一鑑の著されたときより十四年前の一五五〇年（天文十九年）に初めてポルトガル船が平戸へ着き、翌々年の一五五二年より一五六四年（永禄七年）までは殆んど毎年ポルトガル船が入港したのである。その後も横瀬浦や福田などの肥前の諸港へ引き続き渡来した。かくして、中国船もポルトガル船も共に西九州の肥前に集中し、しかも天与の良港平戸を本拠とするようになつた。さればもはや海外貿易の中枢を占めるようになつた。日本一鑑（窮海河話巻四）の著者も、日向・薩摩・大隅などの倭寇関係を指摘した後に平戸の当時を、「平戸島昔鮮人居、今居商衆、二十年以来為二番舶之淵藪一、中国流逋移レ家受レ〇錯綜盤固」と語つた。番舶の淵藪とはポルトガル船貿易の中心地という意味であろう。事実に於ては、一鑑の著されたときより十四年前の一五五〇年（天文十九年）に初めてポルトガル船が平戸へ着き、翌々年の一五五二年より一五六四年（永禄七年）までは殆んど毎年ポルトガル船が入港したのである。その後も横瀬浦や福田などの肥前の諸港へ引き続き渡来した。かくして、中国船もポルトガル船も共に西九州の肥前に集中し、しかも天与の良港平戸を本拠とするようになつた。さればもはや海外貿易の中枢を占めるようになつた。それにも拘わらず、弘治・永禄年間を通じて十数年間は、前述の如く、依然として中国船が往来し、ポルトガル船もその間に五度も豊後へ来た。それは蓋し、豊後には引き続き外国船を誘引するに足るものがあつたからであろう。

わたくしは、この外国船が誘引された理由を次の三つに分けて推考してみよう。その第一は、大友氏の外国貿易に対する熱情である。或いはこれを外国との交渉を保持しようと望む熱意といいかえられるかも知れない。恐らくは大友義鎮その人の虚栄心に基づくかと思われる。足利幕府の遣明船が廃

止され、倭寇がいよいよ猖獗を極めるに従い、浙江総督は倭寇対策を樹てるためにその使者鄭舜功を弘治元年に豊後へ派遣した。それは義鎮の自負心に非常に満足を与えるものであつたらしくて、使者を歓待し国賓として遇した。翌年その帰国のときには領内の仏僧を大友氏の使者として中国へ同行させた。中国へ使者を送つたのは大友氏だけではないが、大友氏は幕府に代つて遣使するという程の意気込みをもつてそれを敢行したのであろう。然るに中国ではそれを承け付けずに、逆に使者が投獄されてしまつたのである。同じく弘治元年に浙江巡撫の使者蔣州が五島・博多を経て豊後へ来たときも、大友氏のこれに対する待遇は鄭舜功のそれに準じた。そうして翌年末に帰国する際には、大友氏はこれに伴うて二度目の使者を派遣した。その翌年に才三次の使者をも出したが、いづれも使命を遂げることができなかつた。(50) 義鎮が中国の使者を歓待したのは、将来中国との間に公の貿易関係を結ぶためというよりは、寧ろこの大国に知られ且つは京都を差し置いて府内へ来たことをこの上ない名誉としたためであろうと思われる。また彼が中国へ三度使者を派遣したのも、貿易の利益を期待したというよりは、日本の代表としてこの大国と交渉できることに満足したのかも知れない。対ヨーロッパ人の関係でも、一五五一年にフランシスコ・シャヴィエルが豊後へ来て初めて交渉が開けると、直ちに大友義鎮はシャヴィエルの印度へ帰えるのに托してその年にポルトガルの印度副王へ使者を送つた。その後も屢々東印度にあるポルトガルの当局者や教会首脳者と通信を交換して、その好意を享ち得、(51) 終には天正の中頃以後の衰運のうちにあつてさえも、一五八二年（天正十年）に著名な少年使節をローマ教皇とポルトガル国王のもとへ派遣するという壮挙を敢行した。彼が耶蘇会宣教師を引見した当初から早くもキリスト教に傾倒したり、それを支援したりする程の好意を抱き熱情を有つたとは思われぬから、遠い世界の西方より彼等が豊後を訪ねて来たことに名誉を感じ、遠来未知の宗教とその布教者に向つて好奇心を動かし、且つは日本では見られないような大船に珍貴の物資を積んで渡来し、大規模の商取引をするポルトガル人に驚歎して、他に先んじてそれらの外来者達の本国との交親を希望したのではなかつたか。それは皆わたくしの想像であるが、しかも最もあり得べき想像であろう。

兎に角大友義鎮の外国関係に対する執心が尋常のものでな

かつたことだけは推定して誤りがあるまい。彼は勿論府内に於ける外国商人の貿易を熱望したであろう。外国船の豊後渡来というだけでも彼の心を満足させたかも知れない。今日に記録が残つていないから断言できないけれども、義鎮がその始めに外国船を豊後へ誘引するのにどれ程力を盡したかはそれを推察して餘りあろう。

第二の理由は大友氏の声望であろう。天文の末より永禄年間にわたつて、大友義鎮の威勢は増大し、その領土も拡がつて、遂に六箇国を支配し、九州第一の強豪となつたことは内外人の間に吹聽せられたであろう。また一度でも東九州へ渡来し、豊後を実際に見た中国人は、大友氏の城下の繁盛と外国人に対する支配者の好意、殊に安全な商取引を経験して、それを喧伝したかも知れない。前述の如く、弘治元年に中国当局者の派遣した使者が二度共に豊後へ来たのは、遣使の目的地として予め豊後が選ばれていたか、それとも使者の任意によつたのかわからぬけれども、当時は大友氏の声望が西国の諸豪族中に卓越していて、先づこれによつて倭寇の対策を講ずべきだと認めたからであろうと推察できる。ポルトガル船に就いてもこれと同様のことが考えられる。恐らくは当初中国人より大友氏の評判を耳にし、また中国船に便乗して豊後へ来たことのあるポルトガル商人から吹聽されたために、彼等の船が渡来したのであろう。豊後に於て実際に大友氏の勢力を認め、その上に特にフランシスコ・シャヴィエルの報じた如く、(52) 耶蘇会士と共に大友氏の非常な温情に接したことは彼等に大きな感銘を与えたであろう。かくしてポルトガル船も亦、平戸で貿易した間にも豊後に来るのを忘却しなかつたわけである。これも皆、わたくしの推察であるが、蓋然性のあることである。

第三にしてしかも最も重要な理由は、貿易上の便宜であろう。大友氏の威勢が将に四隣を圧しようとする頃に、その本拠たる豊後では、殊に繁栄の頂上に近づいた府内には、当時としては他に比較して自からに海外貿易の好条件が具わつたのであろう。それは商取引の安全と輸出入品の集散の多いことでなくてはならない。海外貿易港にとつて輸出入品が迅速に定期に集散できるかどうかは致命的な条件である。それに就いては、当時の貿易品を一瞥しておく必要があろう。外国船の輸入する物、いいかえれば日本の需用する物は、中国産の生絲・絹織物・水銀・陶磁器・香料・薬品類及び中国の銅銭

であつた。外国船の日本から輸出する物の大部分は銀であつて、これに少量の硫黄・刀剣・扇子の如きが付帯した。[53] 銀は天文の中頃から国内の採掘量が俄かに増えた。中国船の夥しい数がその頃より南九州へ輻輳した最大の原因は銀の輸出にあつた。ポルトガル船も亦この日本の銀に惹き付けられて渡来したと主張しても過言ではない。わたくしが外国船というたのは、その点では中国船とポルガル船とを区別できないからである。事実に於て、ポルトガル船は日本人の需めないヨーロッパや東南アジヤ諸国の産物を積んで来たのではなくて、中国南部へ寄港してそこから中国船の齎らすと同じ物をもつて来て、中国船の載せて行くと同じ輸出物を積んで行つたのである。前に列挙した主なる輸出入品を一見して知られる如くに、その大部分が当時の民衆生活に無縁の物であつた。上流階級と少数の富裕な商人が需用したので、一地方内で消費できたのではない。輸出品も亦全国より集めねばならなかつたが、殊に銀は石見の大森銀山にこれを仰ぐところが大きかつた。されば主として瀬戸内海を通じ近畿地方や中国地方との間の海運によつて輸出入品は運搬せられたのである。それには、地元の商人も参加したのであろうが、その大部分の物は京都・堺・博多などの商人が外国船の碇泊地へ往来してそれを取引した。[54] 豊後に於てそのように輸出入品を集散し、且つその設備を具えることのできたのは、多分府内以外ではなかつたであろう。それとても充分にとは行かなかつたかも知れないが、一応は内外の商人を満足させることができたであろう。その点で、府内と前後して海外貿易港として登場した平戸に比較すれば、その外国船を受け入れるには好都合なその位置に於て、また自然に具わつた港として便宜の程度に於て、府内は到底平戸に及ばなかつたのではあるが。このように考えると、兎に角府内が戦国時代末期に於て外国商人にとつて最も魅力ある都市の一つであつたことには疑いがない。されば、前に引用した諸記録に、豊州浦といわれ、豊府と称され、また耶蘇会士によつて豊後の市と報ぜられた地が府内を指示することは、ここに更めて説くまでもあるまい。

府内に於ける外国貿易は永禄の中頃に終つた。その原因は、中国船の方では、嘉靖の大倭寇が終熄すると俄かにその船の日本渡来が熄んだことであり、ポルトガル船の方では、平戸・横瀬浦・福田・長崎のような貿易により好い条件を具え

る肥前の諸港へ専ら入港して、豊後へは一五六〇年（永禄三年）限りで来なくなつたことである。それは決して大友氏の勢力の衰弱の故ではなかつた。何故なら、永禄末には、南方に島津氏の勢力の膨脹の兆が現われ、西に龍造寺氏が自立して次才に強大になろうとしたけれども、なお依然として大友氏は九州才一の豪族であつたばかりではなく、寧ろその繁盛の頂上にあつたからである。

三、府内と沖浜

ここまで論じて来て、さて府内には外国船の碇泊できるような港が果してあつたかどうかとの疑問が起る。何故なら、己に引用した日本一鑑の著者は、永禄の頃に府内の沿岸が遠浅で陸路六・七里の沖浜へ中国船が着いたと自己の経験を語つたし、寛文の西国海辺順見記には川口の港で汐時に小舟が出入できるだけだと記し、附近の生石・駄原・勢家・今鶴・中鶴なども着船すべき浜ではないと伝えているからである。[55] その上、前に関説した如く、耶蘇会宣教師達が府内から京都へ海路を赴くときに、日出や佐賀関から乗船したり、また後に述べる如く屢々沖浜から出発した。これらの事実は国内船さえ府内の浜へは着かなかつたらしいことを暗示する。更にこの問題と不可缺な関係にあるのは、耶蘇会士の諸記録によつてポルトガル船や中国船が府内に近い港へ入つたと考えられることである。次にそれらの耶蘇会の諸記録を挙げてそれを説こう。

一五五一年（天文二十年）秋にフランスコ・シャヴィエルが山口から豊後へ赴いた際に、ポルトガル船のカピタン・ドアルテ・ダ・ガーマが、「パードレ〔フランシスコ〕の一行の来るのがわかつたとき、直に船に装飾をなし、全員に祝衣を着けさせた。その姿が認められるまでにパードレが近づくと、各種の砲十八門を四度にわたつて発射させたから、その大音響で豊後の市中に騒動が起つた。」若い領主大友義鎮もそれに吃驚して、ポルトガル船へ家臣を遣わして何の音かと訊ねさせたという。[56] ここにある豊後の市は疑いもなく府内のことである。礼砲の発射は豊後では初めてそれを耳にしたのであるから、領主を始め住民も悉くこれに吃驚狼狽し大騒ぎが生じたことは想像に餘りある。前引のメンデス・ピントが語つた如く、若しこの船がそのときなお府内から海上四里近く離れた日出に碇泊していたとすれば、当時の原始的な大砲

の音の府内へまで響きわたつたために、住民全部に大騒ぎが起るようなことがあり得たであろうか。更にこの書は続けて、シャヴィエルが大友義鎮に謁見に赴くときのことを次のように述べた。

「パードレは黒いシャマローテを着け、その上に錦を添えた緑色ビロード金翠のある司祭服を纏うた。ポルトガル人達も立派に装うた三十人だけが、別に備えた多数の青年達と共に、華やかにパードレに随行する行列をつくつた。小舟に乗り移つたときに船は動揺していた。覆いを張り、絹の旗を押し立て、シャルメラとフラウタの楽を奏しながら〔小舟〕は進行した。かくして祝砲に送られて河を相次いで上つて行つて上陸した。」

以上の記事は十七世紀の一耶蘇会士の編纂した書に見えるところであつて、その出所がはつきりしないけれども、この文をそのまま信ずれば、一五五一年のポルトガル船の投錨していたのは府内に極く近い海上のようである。シャヴィエルの一行が本船から幾艘かの小舟に分乗し、河を遡つて府内の町へ上陸したのは、堂尻川即ち今の大分川口より遡河したことを意味するのであろう。されば、このポルトガル船は、前に日出へ入り、シャヴィエルの府内到着の前に府内に近い港へ移つたのだろうと推察できる。

次に一五七八年に大友義鎮が一日本人耶蘇会士に懐旧談をした。そのうちに彼の十六歳のときに府内に近い港へ中国人の小さな一ジャンクが六・七人のポルトガル人を乗せて来たと語つたことが、同年のルイス・フロイスの書翰に載つているのを前にも引用した。[57] この書翰には義鎮がその年に四十八歳であつたと記れているから、それより逆算してジャンクの来たのは一五四六年（天文十五年）にあたることをも前に説いた。

また一五五六年（弘治二年）に渡来したフランシスコ・マスカレーニャスの船が、その年の七月から少くとも十月一日までは府内に近い港に碇泊していたことをも、わたくしは前に推定した。[58]

天文以後の二十餘年間に、想像せられる限りでは甚だ多数の中国船、五艘のポルトガル船が渡来したが、その殆んど大部分が府内到着に就いての記録を遺していないから、辛うじて推定できる以上の三つの例、即ち天文十五年の中国船、天文二十年と弘治二年のポルトガル船の場合を以てこれを考察

したのである。そうして天文十五年の中国船、弘治二年のポルトガル船の着いた府内附近の港は、天文二十年のポルトガル船の投錨した港と同一であることに疑いがないとすれば、その船からシャヴィエル一行の上陸したときの記事によつて、その位置が堂尻川の河口より程遠からぬ海上にあつたことがほぼ明らかになる。

前に引用したリンスホーテンの書に載つているリャンポ日本間のポルトガル船航海路程記には、府内へ入る船の指針として、「海岸に沿うてこの底は白砂であるから、それに入るには用心せよ。この低地の端に冷涼な水の〔流れる〕一河川があつて、その河口は満潮のときに十二尋になる。干潮のときには船は皆帆を下して停る。その底は砂である。この河の錨地に接続してアキナファマという住民の多い一部落がある。河沿いに国内半レグアにして豊後国最大にして且つ最も勢力ある都市があり、その前方にこの国の王が通例その宮庭を有する。」(59) そうしてその市中には富裕な商人達がいるということが記録されている。

この記事は弘治頃に於ける大友氏の首都たる府内の繁栄の一斑を暗示するが、そこに見える河は疑いもなく堂尻川であり、府内へ着くにはその川を遡らねばならなかつたことを語つている。川口の深さは満潮のときに十二尋であるが、干潮で船は川口で停まり、中へ入ることができないというのであろう。川口に近く沖浜部落の存在を明示する。但しその部落のある陸地が、果して島をなすのか、府内と陸続きになつているのかわからない。また部落に船の碇泊する港があつたかどうかにも触れていない。然し前にも指摘した如く、(60) 豊後の港を列挙するこの路程記が、府内の名を漏らして沖浜を載せるのは、この両者の間の密接な関係を自らに了解せしめるところである。前引の耶蘇会士の諸記録によつて推定せられた堂尻川に近い港とは、蓋し沖浜を指すに違いない。その点に就いては、この路程記を記した船と同じ頃に府内へ渡来した鄭舜功がその経験を語つた記録によつて更によく確かめられる。日本一鑑浮海図経巻一に於て、彼は「彼域中颶風乃作、漂入二澳浜一、澳浜者乃豊後之地也」とその乗船の沖浜到着を伝え、更に「道広飄々入二澳浜一、策馬往見二豊後君一」と義鎮に謁見に赴いたときを語つた。そうして沖浜に就いては、府内沿岸が「澳浅、膠舟不レ堪二繫泊一、陸二行府内一凡五六里」(巻三) と説明した。これをいいかえれば、府内沿岸は遠浅

であつて船が碇泊できないから、沖浜に投錨した。それより府内へは陸路五・六里程あるということである。この五・六里程は中国里程であるから、日本の一里未満である。かくして、府内へは外国船が入ることができないので、堂尻川口に近い港即ち沖浜に投錨したことが明らかになつた。

この沖浜に就いては、他の耶蘇会の記録にも次のような事実が記載されている。一五五九年（永禄二年）九月にガスパール・ヴィレラが日本人の同宿ロウレンソを伴うて上京するに当り、府内の町から半哩距たる沖浜から乗船し、七哩北方の守江港に寄つたこと、一五六四年（永禄七年）にもルイス・フロイスとルイス・デ・アルメイダとが府内から一哩離れた処に碇泊していた船に乗つて京都へ向うたことである。(61) 一五六四年の場合には地名が明記されていないけれども、沖浜に違いない。尤もこの二つの記事は、豊後を発つて瀬戸内海を東航する沿岸航海の日本船に関するものである。然しそれを以て、遠洋を航海する外国船、殊に当時では世界最大といわれるポルトガル商船と比較して、それより遙かに小さい日本船でさえ府内の町へは着くことができずして、沖浜に碇泊せねばならなかつたことも察知せられる。

この府内に近い港といわれるのが沖浜に違いないとしても、府内からの距離に就いてはそれを記載する書毎に異なつているのはどうしたわけであろうか。これは大きな疑問である。ルイス・フロイスは一五五九年のガスパール・ヴィレラの乗船のときにはイタリヤ里程で半哩と述べ、一五六四年に彼自身が上京する際の記事では一哩というた。それより三十三年後の一五九六年（慶長元年）に沖浜が大地震で海中に陥没したことを報じた書翰では三哩と書いた。(62) 同一人でさえ、時によつてこのようにまちまちのことを記している。尤も一五九六年の場合は、沖浜でも港と限つてその距里を述べたのではない。なおその他にも、前引のリャンポより日本までのポルトガル船航海路程記では、その距里は半レグアと観測されているから、二哩に近いことになる。鄭舜功は中国里程で五・六里程とした。この方も約二哩程になる。

当時の沖浜そのものが現存していないので、今日それを測定して、以上の記載のうちのいづれが果して正しいかを決定することができない。わたくしの想像するところでは、そのときによつて各人各様に大ざつぱに目測したことにも、その異同の原因があつたであろう。また一方から考えれば、沖浜と

称せられたのは小面積の一部落だけではなくて、後に瓜生島の名を以て呼ばれるかなり大きな陸地であり、後世には東西三十六町、南北二十一町、周囲凡そ三里ばかりと語り伝えられた程である。[63] その語る大きさが事実に近いかどうかわからないが、兎に角瓜生島から当時の府内西郊の勢家の浜までの距里が二十餘町、北方は速見郡（今の別府市浜脇）まで十九町あつたといわれる。[64] これも勿論そのまま信ずべきものではないが、これを以て津浜のあつた陸地がかなり大きなものであつたことだけは推察できるから、その陸地から府内の町への最近距里とそうでない処の距里との測定には非常な相違が生ずることは当然であろう。船の碇泊地即ち港は比較的に府内の町に近くして、堂尻川（今の大分川）の川口から遠からぬところにあつたことは前にわたくしの推定したところであるが、それとても府内の町で何処を測定の基準にするかによつて、幾らかの違いが生ずる筈である。されば、府内と津浜との間の距里が記載の書毎に異なつているのを、この理由でも或る程度まではやむを得ぬこととして認めねばならない。

一五五一年にフランシスコ・シャヴィエルが豊後へ来てから、[65] 津浜に宿舎を得たことが知られているが、彼はそこより随時に府内の町へ赴くことができたのであろう。されば津浜は府内の一部分と見做すべき程の密接な関係を有つていたに違いない。蓋し津浜が府内の外港であつたのである。然し、一方より考えれば府内自体が外国船ばかりではなく、国内沿岸航路船をさえ碇泊させる程の港を有たなかつたのであるから、実質的には津浜こそ当時の府内港であつたといえぬこともない。ポルトガル船の航海路程記には、船の着けない府内を載せずして、津浜を挙げてあるのは、その意味に解すべきであり、且つは津浜の名が已に内外の航海者達や貿易商人の間によく通つていたことを示唆する。

それに就いては、津浜部落が、府内と接続する陸地にあつたのか、それとも瓜生島と称せられた島の一部分を占めたのか、その位置と地勢とによつて府内に対する関係も幾らかは違つて来る筈である。鄭舜功が陸行五・六里の間を騎馬して津浜から府内へ赴いたとその経験を語つたのは陸続きであつたことの証言と見做すべきである。これと反対に、一五五一年のフランシスコ・シャヴィエル一行も一五五六年のベルシオール・ヌーネスも本船から小舟で川を遡つて府内へ上陸したと報ぜられたのは島であつたことを立証するものであろう

。憶測すれば、干潮のときには府内の町と津浜のある陸地との間の浅海が干し上つて陸続きとなり、逆に満潮のときにはその陸地は島となつたのかも知れない。然しそれも仮の想像であつて、容易にこれを断定することができない。[66]

最後に少しく府内の外港津浜の戦国時代以後の推移に触れておこう。前に述べた如く、永禄の末に外国船の渡来が絶えたけれども、大友氏の勢力の維持されていた間は、九州東岸に於ける才一の港として、国内沿岸航海船が相変らず盛んに出入したことは推察の限りである。天正六年（一五七九年）に大友氏が島津氏に敗れて徹底的の打撃を蒙り、また天正十五年（一五八七年）豊臣秀吉の九州征討後に、豊後一国の領主として大友氏の地位が安定し、次いで文禄二年（一五九三年）に大友義統が除封されて、翌年府内が一万三千石の小藩主早川長敏の城下となつたが、それらの豊後に於ける政治上の変遷毎に府内は盛衰を繰り返し、その影響は津浜の港にも及んだことであろう。然しその間の実情は詳しくこれを尋ねることができない。慶長元年（一五九六年）秋七月の大地震の前には、佐賀関・ハマオキほか[67]一港に津浜を加えた都合四港へ大小多数の船が出入し、豊臣秀吉直属の船も見られたことが、地震の遭難者たる津浜のキリスト教信者ビヤジョ[68]の報告[69]によつて知ることができるだけである。これを以て、少くとも大友氏没落以後には、津浜が依然として豊後の活気ある港であつたけれども、その才一位を占めるという程の重要性を有たなかつたらしいことが推察できる。

以上に説いて来た如く、天文の中頃より約半世紀間活動した府内の外港たる津浜は、遂に慶長元年の大地震の際に海底に没し去つた。地震に伴うた大津波によつて、津浜の陸上の一切の物が消失し、入港していた大小の船は悉く破壊されたと、津浜の住人にして辛うじて生命を全うした前引のビヤジョの語つたところがフロイスの年報に詳報されているし、その惨状は同じく生き残つた一人の「柴山勘兵衛記」[70]によつても窺い知ることができる。

註

1、小葉田淳氏、中世日支通交貿易史の研究　昭和十六年刊、才三章才四節・才五節参照。

2、明の嘉靖の末には倭寇が猖獗を極めたので、その対策を論ずるために数種の日本関係の書が著わされた。嘉靖四十年の鄭重曽の日本図鑑、四十一年の同著者の籌海図編、四十三年鄭舜功の日本一鑑は日本の事情を記すことが最も詳しい。九州沿岸路程は日本

一鑑に見えるのが最も精詳だから、特にこれを代表的に択んで引用する。

3、今の地図や地名辞書には大泊の名が見出されない。旧西荘文庫所蔵の西国海辺順見記（幕吏高林又兵衛と向井八郎兵衛の寛文七年に於ける西国諸港巡察記録、写本）大隅国の項に、佐多の直ぐ東にある大泊が記され、「湊南向也、狭シ、南風悪シ、此所ニテ汐ノ〇ヲ待テ薩摩入海ノ内ヘ乗也、汐ニ向テハ櫓技何丁立モ少モ入事不成、沖ノ方ヘ引落サルル也」という説明が添えてある。佐多村字伊座敷浦に違いない。

4 日本一鑑にはまた「月浦津、一日膽月即肝属」との言葉が加えられている。古くは内浦を肝付港と称した。

5、日本一鑑には、千湊に就いて「古大隅地方湊口、可停、湊内謬舟不堪繫泊」との添へ書きがある。前引の西国海辺順見記日向の項に、福島今町の前に湊浦として記載されている処である。玄与日記文禄五年閏七月七日の条に「ちのの湊」といわれている。本城村崎田浦（今の串間市内）のことである。吉田東伍、大日本地名辞書、日向国南那珂郡本城の項参照。

6、一鑑には伯を阿致と音じてある。檍はアワキと読まれているから、その訛音かとも思われる。但し日向灘に臨む砂浜であつて港ではない。

7、一鑑には徳潭に大固懦付致の読みが添えてある。トクノフチと音じ、伊東氏が都於郡に本拠を置いた間の要港たる古の徳淵港。一ッ瀬川々口にあり、児湯郡（当時は那珂郡）に属する。

8、一鑑に「垢水一日赤水」と見える。前引の西国海辺順見記には細島及び尾末（今の門川）の北、土々呂・鯛名の南に赤水の記載がある。

9、一鑑に「東海一日遠海」とし、大島密即ちトウミの音が付いている。今延岡市の一部分となつている浅水湾である。

10、一鑑に「大〇懦世迺」即ち タケノシマと読み、豊後に属するとある。

11、坂関では、一鑑に「海産佳魚、長二尺許、其味甚甘」と付加されている。その佳魚を太奈易阿というているが、何魚であろうか。兎に角この一文は著者鄭舜功の佐賀関に於ける実際の経験の一端を漏らすものであろう。

12、高島は、一鑑に「関上」と見える通り、佐賀関の東方海上の一小島に過ぎないが、「乃大友司牧修理大夫閑僻之居」であつたから記載されたのである。

13、前引の順見記には、生石・駄ノ原・清家・沖ノ浜・堀川・府内の順に、大分川（当時の堂尻川）々口までの船着場の列挙がある。そうして、生石は「片湊」、駄ノ原は「片浜」、清家は「干潟湊南風悪シ」、沖ノ浜は「干潟深シ」、府内は「川湊悪シ、汐時ニ小舟出入」と記されるが、堀川だけには「入江ノ湊也、何風ニモ吉」と書かれてある。大分川の東では今鶴・中鶴・鼻鶴・萩原・新貝・原などを記載し、そのどれにも「遠干」即ち遠浅だと片付けてしまつている。この順見の行われた寛文年間には今の大分市沿海に良い港のなかつたことは、これを以て知られる。堀川が入江に沿い小船の着けるただ一つの船着場であつたのであろう。寛文より百餘年前の天文・弘治・永禄の頃の府内附近の沿海をも、

これによつて推察されぬではない。但し順見記に見える沖浜は戦国時代の沖浜ではなく、後に説く如く、当時海中にあつた沖浜の陸地の陥没後に、同名を府内に接続する海浜に与えたものである。

14、一五四六年に鹿児島湾へ来て貿易をしたポルトガル船の船長ジョルジ・アルヴーレスが、一五四七年末にマラッカでその見聞した日本の事情を書いてフランシスコ・シャヴィエルに与えた報告書である。ポルトガル語・エスパニャ語・イタリヤ語の当時の写本十二種が今に伝わつているから、当初の日本を知るために、如何に珍重せられたかがわかる。わたくしはそのうちのポルトガル外務省所蔵エスパニャ語写本を公にした Jeronymo P. A. da Camara Manoel, Missoes dos Jesuitas no Oriente nos seculos XVI e XVII. Lisboa 1894. pp. 77—80 に拠つた。(岡本、十六世紀日欧交通史の研究、昭和十一年刊、三〇四—三〇六頁参照)

幸田成友氏は A. Thomas Pires, O Japao. (O Instituto. Vol.54, No.1. Coimbra 1907) のポルトガル語本をシュールハンマー師の説に従い、最善本としている(日欧通交史、二四頁)が、わたくしの見るところでは両者の間にその価値の相違が殆んどないようである。

15、これらの南九州及び東九州の諸港名を、嘗て一度十六世紀日欧交通史の研究三〇四頁に載せたことがある。他書との対照のために、その港名の比定に於て考を更めたところもあるので、ここに再度それを掲げる。

16、Minato は、日本一鑑記載の千湊を「ちのの湊」の「ちのの」を除いて略称されたのであろう。幸田氏は豊後国東半島の安岐湊に充てた。然し、ここでは外浦の前に指示されているから、福島に近い千湊とする方が妥当である。

17、Dozorina を、トーマス・ピーレス刊のポルトガル語本は Dooxyma と綴つている。両方ともに Fosoxyma の誤写であろう。

18、Fungamon を、ピーレス刊ポルトガル語本は、Firynga としている。日向の訛と見做すべきであるが、いづれかの港を指示するのではあるまい。この報告書の筆著アルヴーレスが、国名の日向を聞き誤つて港の名としたのであろう。

19、Bunono を、前記ポルトガル語刊本で Bungao とし、セビーリヤの印度文書館所蔵エスパニャ語写本は Yungo に綴る。幸田氏がこれに豊後を充てたのは妥当である。前註で日向に就いて述べた如く、国名豊後が港名と見做されたのであろう。

20、Chenou を、ポルトガル語刊本で Xaquenou とし、セビーリヤ写本に Saqueno と綴る。幸田氏は佐賀関に充てたが、それにはなお充分に疑問の餘地がある。

21、朝鮮の中宗実録に、中宗の三十七年(天文十一年)に、山口の大内氏の使者安心の京城へ赴いたことが記録されている。この使者の携行した書のうちに、「大明漂倭八十餘名、被風放来干日本之豊州浦、令問其姓名則不敢言、皆大明国裏去京万里南境之商賈也」という一節がある。(小葉田氏、前引書、四八二頁所引)これは天文十一年(一五四二年)に於ける中国船の豊後到来を語る

ものである。

また一五七八年に、大友義鎮が一日本人耶蘇会士に懐旧談をしたことがある。その言のうちに、彼の十六歳のとき府内附近の一港へ六・七人のポルトガル人を伴うた中国の一小ジャンクが渡来したことがあつたという。(Cartas. Ed. de Evora. 1598. I, f. 422; Luis Frois, Segunda parte da Ilistoria de Japam. Tokio 1938. p.18) このジャンクの豊後へ来たのは、その年の大友義鎮の年齢より逆算して一五四六年(天文十五年)のことであつた。

天文年間に於ける東九州への中国船の渡来を伝える書、例えば日向記に、「同(天文十二年)癸卯年、日向の津々浦々に唐船十七艘入来故、異国の珍敷物数不レ知、浦々大いににきはひけり」とあり、豊薩軍記に、「天文十年、明人府内へ着津来朝す、同十二年八月又五艘来る、同十五年佐伯の浦に着岸す、その後永禄中数回来る」(この種の記事は鎮西要略などの数種の書に載つている)と見える如きは、厳密にいえばその記事のままではそれを信じ難いが、天文年間に日向・豊後へ中国船が幾度か着いたのが後に記憶されて、これらの書に伝えられたのであるから、大略はそれに近いものであつただろうと推想できる。

22、Jan Huygen van Linschoten, Reys-gheschrift vande Navigatien der Portugaloysers' in Orienten inhoudende de Zeevaert... Amsterdam 1595. pp. 73-76.
この路程記にある東九州の諸港名を、嘗て十六世紀日欧交通史の研究五一七頁に列挙したことがある。その後これらの地名に就いて考を更めたところがあるからここに再度掲出する。

23、リンスホーテンの採録した原路程記には Ycoo ではなく、Yvoo と綴られていたのであろう。硫黄島であるに疑いがない。

24、Minato は千湊であろう。註5・16参照。

25、Quimonsiqui は大隅の肝付である。日本一鑑の月浦に該当する。註4参照。この路程記には、志布志に近くして不良港と記されている。

26、日向南那珂郡の沿海で外浦及び油津附近に Cico に近い音で称ばれる海浜の部落が見当らない。この路程記には外浦より五レグア距るという。

27、Umbra は、元は Ambra とでも書かれていたのであろう。油〔津〕の音である。

28、Undo は鵜戸に違いない。然し鵜戸は断崖直下の荒磯をなし、船を着ける港ではない。

29、Tomxijma は Fosoxijma の誤写であろう。河口にあると記されているが、細長い港であるから、そういうたのであろう。

30、Camyco は Camae の誤写であろう。この路程記では日向の北端にあるとせられるが、事実は豊後の南端に近く位置する。

31、リャンポに於けるポルトガル人の密貿易根拠地の活動、その破滅の事情に就いては、日欧交通史の研究、一一七―一二五頁を見られたい。

32、同前書、三五六頁。

33、同前書、五〇五―五〇六頁。

34、航海年表の一は Do tempo determinado em que vierao os

Pes. da India p. Japao e Irmao, e pelo conseguinte os Capitaes todos desta viagem do Japao. (Biblioteca da Ajuda, cod. 49-Ⅵ-56, fs. 3-4)と題し一五九七年までのもの、他の一は Lista dos Annos, Viagens, e Capitaes mores do trato de Japao (Bib. da Ajuda, cod. 49-Ⅵ-66, fs. 41v.-42) といい、一六三九年の鎖国の年までのもので、両記録は共にリスボンのアジュタ図書館所蔵の写本である。

35、Fernao Mendez Pinto, Peregrinacam. Lisboa 1614. fs. 284, 297v.

36、Ibid., f. 275.

37、Joao Rodriguez, Historia da Igreja do Japao. (Bib. da Ajuda, cod.49-Ⅵ-53) f.235.

38、フランシスコ・シャヴィエルの現存書翰はその写しをまで漏らさずに悉くこれを集めて公刊された (Georg Schurhammer & J. Wicki, Epistolae S. Francisci Xaverii...Roma 1944-1945. 中に日出に関して委細を報ずる書翰が載っていない。このシャヴィエル書翰集の才九六号の一五五二年一月二十九日付印度コチン発の一書翰中で、豊後の一港へポルトガル船が入ったことを簡単に触れているだけである。

39、Rodriguez, op.cit., ed. de Macau 1954, p. 133.

40、一七―一八頁。

41、Cartas. Ⅱ, f.1. (村上直次郎氏訳、耶蘇会の日本年報才一輯一二三頁)

42、Christovao Ayres, Fernao Mendez Pinto. Lisboa 1905. pp.100, 108. (村上氏、耶蘇会士日本通信豊後編上巻、二三二―二三三頁・二四一頁)

43、この祭日を今は万聖節と訳されている。十月一日にあたる。

44、Ayres, op. cit., pp. 103, 108. この一節の前後数行はアイレス氏の公にしたアジュダ図書館所蔵書翰集のエスパニヤ語訳文にあつて、一五九八年エヴォラ版所載ポルトガル語文には省略されている。従つて村上博士訳の前引耶蘇会士日本通信豊後編上巻にある訳文にも現われない。

45、十九頁。

46、Ayres, op. cit., pp. 103,108. (耶蘇会士日本通信豊後編上巻、二三三頁、二四七頁)

47、Cartas. Ⅱ, f. 149.

48、豊隣軍記は当時の府内に就いて、「都鄙遠国の商人きそい来りて、人馬常に聯闠として道を遠くるに地なく、港には出入船舶舳艫をきしつて舟子の叫声雑沓として喧し、富栄の謳歌巷に満つ」と叙するのは、後人の想像を加えて少し誇張した表現である。殊に後に説く如く、府内の海浜には碇泊の船舶が舳艫相接するというような港があつたのではないから、それこそ虚妄の言である。また最近では大分市史大友時代の述べる如き博多（十五世紀後半の朝鮮・琉球貿易の中心地であつた頃に較べて）、長崎（文禄・慶長頃の南蛮貿易の最盛期に比して）を凌ぐ程の商業都市であつたというのも誇張し過ぎる。

49、Cartas, ed. de Lisboa 1570. f. 513. (耶蘇会士日本通信豊後編下巻四九頁)

50、小葉田氏、前引書才八章才一節に拠る。久多羅木儀一郎氏、大友後期の対明交通（大分県地方史才五号所載）参照。

51、岡本良知、天文・永禄年間に於ける西国諸侯の印度交通（日葡交通才一輯所載）参照。

52、前引シャヴィエル一五五二年一月二十九日付コチン発書翰。

53、小葉田氏、前引書、四八一頁、神戸市史才二輯別録、三三八頁。十六世紀日欧交通史の研究、才三編才二章参照。

54、堺市史才三編才十四章才二節。神戸市史、同前、才五章才三節。

55、註13参照。現今の大分港は、大分市の西北端の当時の生石村より勢家村の一部分の沿岸の海底を掘り築堤して港としたものである。

56、Sebastiao Goncalves, Historia dos Religiosos da Companhia de Jesus...nos reynos e provincias da India Oriental. (Biblioteca Nacional de Lisboa, cod. B-17-34, Liv. VI, cap. IX.) この書は十七世紀始めに編述された東印度耶蘇会史であるが、今なお未刊、リスボン国立図書館所蔵である。ここに引用するフランシスコ・シャヴィエルの山口より府内へ到着するときの、また府内滞在中の記事は現存のシャヴィエルの諸書翰に見えない。フェルナン・メンデス・ピントがシャヴィエルの豊後入りを極めて誇張的に語るところに拠つて、この一節が書かれたかも知れないと考えられるが、また一方では著者ゴンサルヴェスが耶蘇会宣教師であつたので、十七世紀初めに東印度でこの事実を報ずるシャヴィエルの一書翰を見たかも知れないとも考へられるから、ゴンサルヴェスの著書として引用する。

57、註21を参照。

58、一一頁を参照。

59、Linschoten, op. cit., p. 76v.

60、七頁。

61、Luis Frois, Die Geschichte Japans. 1549-1578. Leipzig 1926. pp. 73, 224.

62、Frois, Trattato d'alcvni prodigii occorsi l'anno M.D. XCVI nel Giapone. Roma 1599. p.46.

63、市場直次郎氏等著、豊府古蹟研究（昭和六年刊）一五七頁の瓜生島の項に、天保年間に阿部淡齋の編述した辯城雑誌の記事を載せ、そのうちに更に雑誌にあるこれらの数字を引用している。

64、同前書一五六頁所引。

65、G. Schurhammer, Der hl. Franz Xavier in Japan. (Schriftreihe der Neuen Zeitschrift fuer Missionswissenschaft.) 1947.s.37.

シャヴィエルの沖浜に於ける宿舎の主人ブラス夫妻やその兄弟などが、そのときからキリスト教信者になる機縁を得た。そうして一五七五年（天正七年）にはなおこの沖浜のブラスとその弟のペドロとが熱心な信者であつたことがフロイスによつて伝えられている。(Frois, Segunda parte da Historia. p. 105)

66、瓜生島に就いては種々の論議が行われたし、また今でも行われている。最も極端なのは曾てその存在したことをさえ疑う説がある。わたくしは沖浜のあつた陸地が瓜生島の名で称ばれたかど

うかの問題にはここには触れない。何故なら、この論文では沖浜の陸地を確認すればこと足りるからである。そうしてその他は別の問題に属する。但し、その陸地の位置と広さとには、この論文では無関心で過せないが、今はそれも深く追求しない。後世に曽て存在した瓜生島の姿を復元したといわれる数種の地図が作られているが、豊府古蹟研究の著者達が種々の点からそれに論難したことがある。わたくしはそれらの論難以上に信頼し難いものであろうと思う。完全な島であつたかどうかをさえ断じ難い程であるわたくしがただ一つ確信を以て断言できるのは、本文にも説く通りに、沖浜の陸地が慶長元年までは存在したことである。

67、イタリヤ語訳文で Farnaoqui と綴られている。何処に比定すべきか疑問である。「ほか一港」とある港の名が記されていない。

68、次註に記す如く、ここに引用するのはイタリヤ語訳文であつて、この沖浜の住人の名を Biagio と綴られている。ポルトガル語原文から訳されたときに、この日本人の名がイタリヤ語風に誤り読まれたに違いない。

69、この一五九六年のフロイスの長崎から出した年報のイタリヤ語訳版 Frois, Trattato. pp.110-116. 中に、このビヤジョの遭難経験の報告が詳しく載せられている。

70、前引豊府古蹟研究、一六二頁所載。

豊府聞書最古本？

本誌才四号に、久多羅木儀一郎氏が「豊府聞書と豊府紀聞」の題下にその異同を書いてある中に「しかるに豊府聞書としての完本は極めて稀で、私の知つているのでは、大分市春日浦増沢近知氏所蔵の只一部だけであつてその裏表紙の内側に「干時文化十二乙亥歳初夏写之」と記されている。」とあるが、筆者所蔵のものには「維時寛政八丙辰歳蟋月中旬於遊焉齋写之」とあるので、増沢本よりも十九年前のものである。未た増沢本と校合する機会を得ないが、久多羅木氏の所引文によると、僅かに字句の相違があるだけである。尚久多羅木氏は「たゞ増沢氏所蔵本によつて、豊府聞書の本書の姿を窺い得ると共に、紀聞といふ書名は、後世において一部の人により勝手に変えられたものであるから、最初の如く豊府聞書と称するのが、著者の意に適うものと思ふのである。」と書いてあるが、今のところ私共の知る範囲では最古と思はれる筆者所蔵本にも同じく聞書となつているので、久多羅木氏の所説は妥当だと筆者も考える次第である。

因に筆者所蔵本には裏表紙内側に大城氏と後書してある。なほ筆者本に「於遊焉齋写之」とあるのは後に安政四年に北ノ丸の近説旧宅を文武の道場として設けた遊焉館と何等かの関連があるのではあるまいか。

（立川輝信記）